

笑いのオチは万国共通

フランススで落語公演

林家染太(俗身)に聞く

給出身の落語家・林家染太(38)大阪市住佳がこのほど、仏・パリで開演された国際的イベント「アビヨンの演劇祭」に参加、1カ月にもわたる公演を終える帰国した。毎年のように海外で落語を演じている染太もこう語る。最初は、現地の様子を聞き回りを聞いた。

(聞き手・斎藤十朗)

今回公演が実現した経緯は、

日本在住落語家があり、落語を愛護しているフランス人の友人2人から、1年半ほど前に「スナック」の盛りだくさんと言われた半分落語を思いついて、もしもあれがあればよい企画取りができた。この間にフランス語を覚えた。

公演内容は、

誘ってくれたフランス人に「今方國語で落語を(なま)三喜楽楽師匠を加えた4人のチームで公演を続けた。もちろんフランス語。自分は「ほろひのま」「時どどん」という日本らしいネタを用意。翻訳家でもある其の地のフランス人が

うまくフランス語落語に仕上げた。

現場での苦労は、

1カ月前、毎晩の公演はさすがにきつかった。舞台中は「軒先を借り切つて、一人で自然の共同生活。帰国後はベトナムで寝込んでしまったほど。演劇祭は、世界中から来たさまざまな分野の

落語家めいしと押し、日本版のオチオチと同じ分名の劇場に足を運んでもらうのは大変。朝晩後に「ミーティングをしてから街に出て、冬天下り長時雨を降らせ、その後には劇場入りするまで返ってきた。

1観客の車は、

フランスの客は「お手紙を見」みたいな感じ。でじつは「お手紙」から見る落語自体になじみがない。最初は心配だったが、皆さんよく笑ってくれた。

正座した1人の観客が、

男と手めぐりだけで「トリ」を語る落語は客の想像力をかき立て、秀逸なコマディとの評価をもらった。アリアがあるのは万国共通。現地の人も

大坂のオチオチと同じ

とろろ笑ってくれた。

1印象に残ったことは、

遠方からの客が地元

の落語家は、集客が難

しく、不安を抱えて公演

に臨んだ。帰国直後は客

席が暗く見えなかった

が、目が慣れてくると、

立ち見エリアまで満席に

なっているのが分かった。

感動と涙が出た。

「4人も見た」と言う

で、これなりピーターも

り、足跡は残されたのでは

ないか。プロ意識の強い

各国のエンターテイナー

と交流できたことも取

得。苦労は多かったが、

チャンスがあればまた行

きたい。すでに何度も行

たい。そのなめにはもつ

と落語勝たなければ。



演劇祭期間中は世界中のエンターテイナーが集まる仏・パリで空中浮遊を披露するインストロム・パフォーマンスマーと記念撮影する林家染太(左)